



『夜のバレエ』(1653)
でアポロに扮したルイ
14世 アンリ・ディ・ギ
セー画 © BnF



ブリジット・ルフェーヴル Photo: Anne Deniau

ルフェーヴル監督 インタビュー

パリ・オペラ座バレエ学校は、今年で設立300周年を迎えます。同団監督のブリジット・ルフェーヴルのインタビュー(聞き手フランソワ・ファーク)を抄訳でお伝えします。

——大がかりな記念行事の意義は、どこにあるとお考えですか？

記念というより、創作を通しての祝賀と捉えています。記憶することは大切ですが、過去に浸ったままではいけませんから。私たちは厳格さや、これみよがしでない技術といった、ルイ14世が1713年に築いた礎を守り続け、それによってフランス派のバレエの優雅さを形成してきました。ルイ14世自身が踊ったのは自己顕示のためでしたが、やり方は威厳あるものだったのです。私たちも超絶技巧を否定はしませんが、ロシアやキューバのような派手な踊り方はしません。フランスを体現するバレエ学校とバレエ団が必要だというのは高度な政治的判断でしたし、歴代の為政者たちは常にそれを支持してきました。

——パリ・オペラ座は長い歴史の中で大きく進化してきましたが、あなたは伝統的なバレエ以外のダンスを広く採用しています。

ええ、でもそれでフランス派が損なわれるとは思いません。附属バレエ学校の存在によって、ルイ14世以来のスタイルを維持し、古典レパートリーを継承できるのです。一方で、現代を未来へと手渡してゆくことも不可欠です。キリアンの『輝夜姫』を先日上演したのも、そうした考えからです。パリ・オペラ座独自のスタイルや魂を反映した舞台になることは承知の上で、現代の名作を再演する場でなくてはなりません。『春の祭典』のときはピナ・バウシュにあらかじめ、「あなたのところで初演したままにはならないと思う」と耳に入れておきました。ピナは不安だったようですが、仕上がりは素晴らしいものでした。

——政治的な理由から、ロシアのバレエは長らく鎖国状態でした。今もキューバは同じ状況に置かれています。

理由は違いますがデンマークもそうですよ。時代の流れに取り残されているのは、彼らには頭の痛い問題でしょう。フランス派は、浮き沈みはあっても総じて“旅する流派”でした。身びいきに聞こえると困りますが、古典名作をいくつも生み出したのは、フランスで訓練されたフランス人ダンサーたちだったのです。ロシアでね。フランス派とは、規律と反骨精神を兼ね備えたものとも定義できます。

——逆にヌレエフは、ロシアから来て一時代を画しました。

ヌレエフは舞踊監督としてではなく、才能を見出し、レパートリーを強化した点で偉大だったのです。自由な芸術家でしたが、プティパの土台から離れることはなかった。そしてパリでは、典型的なフランス派の教師であるレイモン・フランケッティを重用し、サン・シモンを読んでいたよ。

——パトリック・デュポンが『ジゼル』の美術を現代風に刷新したのは、時代の先取りだったのでしょうか、それとも失敗だった？

宣伝効果は上々でしたが、第一幕は的外れ、第二幕は美しかったですね。私は視覚芸術にも興味があるので、バンジャマン・ミルピエには来シーズン、ラヴェルの『ダフニスとクロエ』に、美術はダニエル・ビュランで新版を作るよう依頼してあります。現行のジョルジュ・スキピンの振付では、ビュランの現代的な視点とは合わないでしょう。

——私の推測が正しければ、パリ・オペラ座の舞踊監督に就任したからには、バンジャマン・ミルピエも古典を手掛けてみたいのでは？

彼の任命には驚きませんでした。持てる知識を伝えてゆくという意味では、候補者の中で適任だったのはローラン・イレールかマニュエル・ルグリでした。フランス派とは、知識です。一人ひとりの監督がその鎖の輪に連なることで、発展していくのです。こんなことを言うのは二人への敬意からですし、私はもちろんバンジャマンのことも尊敬していますよ。でも彼は今はまだ地に足がついていない状態で、方針を述べると言われても混乱するだけでしょう。

——300周年祝賀の企画について教えてください。

校長のエリザベット・プラテルと協力して進めています。彼女は歴史の連続性を重視してクロード・ベッシーの『ワルプルギスの夜』を押し、私はベアトリス・マサンとニコラ・ポールの名前を挙げました。マサンはバロック・ダンスの使い方がユニークで、ポールは知識と彼自身の繊細さを巧みに融合させた作風。またジャン＝ギョーム・パールは『泉』など古典の振付で才能を発揮していますし、ピエール・ラコットの無尽蔵の知識なしにも立ち行きません。(訳:長野由紀)